CD 020

The lord and his servants looked up. The greedy man threw the ashes into the air, but strangely the ashes did not turn into flowers. The ashes remained ashes, and they fell on top of the lord and his servants, stinging their eyes and making them choke.

"It's an attack!" shouted one of the servants, and he took out his bow and arrow, and shot the greedy man through the heart. And that was the end of him. As for the greedy woman, she ran away in terror, and lived the rest of her life alone, poor and hungry. The old couple, on the other hand, lived happily ever after.

■look up: 見上げる ■strangely: 奇妙なことに ■sting: 刺すような痛みを感じる ■choke: 息をつまらせる ■attack: 攻撃、襲撃 ■bow and arrow: 弓矢 [arrowが矢で、bowがそれを飛ばす弓] ■end: 最期 ■in terror: 恐怖で ■the rest of ...: 残りの… ■on the other hand: その一方で ■lived happily ever after: その後いつまでも幸せに暮らしましたとさ [昔ばなしの最後でよく使われる決まり文句]

JR

CD 001

むかしむかし、山奥の小さい寂れた家におじいさんとおばあさんが住んでいました。2人はとても貧しく、平凡な生活を送っていましたが、ある日のこと、そのあとの2人の人生をずっと変えてしまうような、とても不思議なことが起きたのでした。

おばあさんは、小さな自宅の前にかわいい子犬が座っているのに気づきました。

「迷子になってしまったのかい？」おばあさんはやさしく尋ねました。「お父さんとお母さんはどこにいるんだい？」

子犬はその大きくそして寂しげな目でおばあさんを見つめたので、おばあさんの心はとろけてしまいました。

「うちに入って、わしらと一緒に暮らせばいい」とおばあさんは言いました。

CD 002

子犬はしっぽをふりながら、うれしそうに吠えて家の中に入りました。

その後、おじいさんが帰ってきましたが、そのかわいい子犬を見ると、とたんに心を奪われました。おばあさんもすでにその子犬のとりこになっていて、2人にとって、恵まれなかった子どものようになりました。2人と1匹は一緒に長い間幸せに暮らしていました。

CD 003

ある年の春のはじめ、すでに一人前になっていたあの子犬が、おじいさんのところに駆け寄ってきて上着を引っ張りました。

「何だい？」おじいさんは笑いながら言いました。「わしに何か見せたいものでもあるのかい？」

犬はうなずくと玄関の外へと駆け出しました。

「待ってくれよ」おじいさんは叫びます。「わしが年寄りだということを忘れたんだね。お前のように速くは走れないよ」

おじいさんはゆっくりと犬のあとを追って森へ入って行きました。犬はおじいさんの前を走り、2、3分ごとに止まってはおじいさんが追いつ

くのを待ちました。そしてようやく立ち止まると、犬は穴を掘り始めました。

CD 004

「何をしているんだい？」息を切らしたおじいさんは、ひと休みしようと近くに座りながらそう言いました。「また骨だった、なんてことはないことを願うよ」

犬は土を掘り続け、とうとう地面に大きな穴ができました。すると犬はおじいさんのところへ駆けてきて、穴のふちまで連れて行きました。おじいさんは中をのぞき込むと息を飲みました。穴の底には何百枚もの金貨がぎっしりあったのです。おじいさんは犬を抱きしめ、そして、家まで走って行き、おばあさんに見つけたものの話をしました。

「この犬のおかげでわしらは金持ちだ！」おじいさんはうれしそうにおばあさんに言いました。「夢にさえ見ることもないような金持ちだぞ」

おじいさんは穴と家を行ったり来たりして、金貨を持ち帰りました。犬は楽しそうに吠えてしっぽを振りながら、おじいさんの回りを駆け回っていました。

CD 005

しかし、その老夫婦の家の近くには欲張りな男が住んでいて、おじいさんが金貨を運んでいるのを見ていました。その男はじっと見ているうちにその金貨がほしくなりました。あまりにその金貨を手に入れたくなったので、男は大きなこん棒を持って老夫婦の家へと向かいました。

男が着いたとき、老夫婦は金貨の山を前にして、少し呆然として座っていました。

「こんなにたくさんどうしようか」。おじいさんはおばあさんに言いました。

おじいさんがそう言ったとき、玄関の戸が開きました。あの欲張りな男がこん棒を手に玄関口に立っていました。「わしに全部くれればいいんだ」。男はそう言いました。

CD 006

おじいさんとおばあさんは恐ろしくて何も言えませんでした。犬は部屋の隅から怒ったようにうなりました。欲張り男は自分の袋の中に金貨を入れ始めました。「こんなにたくさんどこで見つけたんだ？」男は聞きました。「もっとあるのか？」

おじいさんは正直者で、欲張り男におじいさんの犬がどうやってその金貨を見つけたか寸分違わず話してしまいました。

「そうか、それなら、おまえのかわいい犬も連れて行くことにしよう」。欲張り男は笑いながら言いました。「こいつがどこへ行けばもっと見つかるかを教えてくれるってわけだ。来い、ワン公」

犬はまた怒ってうなり、動こうとしませんでした。

CD 007

「さあ、来るんだ」。欲張り男は怒鳴りました。「さもないと、この間抜けな年寄りどもを殺してしまうぞ」

男は恐怖におびえている老夫婦の目の前でこん棒を振って見せました。犬はうなるのをやめました。そして、うなだれ、降参するように男のほうへ行きました。

「いい子だ」。欲張り男は笑いながら言いました。「さて、このじいさんばあさんを生かしておきたければ、金貨がもっとたくさん見つかる場所を教えるんだ」

そう言って男は戸の外へと犬を蹴飛ばしました。

CD 008

犬はゆっくりとそして悲しそうに森を抜けて行きました。欲張り男はうれしそうに手もみしながらついて行きました。あれだけの金貨をどうしようかと考えては笑いました。時々男は犬を激しく殴っては怒鳴りました。「金貨はどこだ。おれはいますぐほしいんだ」

ついに犬は立ち止まりました。

「するとここに金貨が埋まっているのだな」。欲張り男は聞きました。

犬はこっくりとうなずきました。

CD 009

欲張り男は犬をつなぐと穴を掘り始めました。男は掘って掘って、掘りまくりました。両手からは血が流れ出しましたが、貪欲さには抗しがたく、手を止めることはありませんでした。そしてとうとう大きな箱を見つけました。

「おお、金貨だ」。男はそう言って箱を穴から引き上げました。「見てみろ、ワン公。おれは世界一の金持ちだ」。

男は箱を開けました。そして、恐怖のあまり飛びのきました。箱の中は毒蛇だらけだったのです。シューシューと音をたて、スルスルと箱から出て、男のほうへ向かってきました。そのエメラルド色の目は悪意に満ちています。欲張り男は悲鳴を上げました。

そのころ、老夫婦は家で待っていました。最愛の犬のことが心配で、一晩中待っていたのです。

CD 010

次の朝早く、おばあさんはまるで心臓がまっぷたつに裂けたように、胸に激しい痛みを感じました。

「どうしたんだい？」。おじいさんが聞きました。

「わかりません」。おばあさんは答えました。「でも何か恐ろしいことが起きたような気がするんです」

果たして、恐ろしいことが起きていました。

前の晩、欲張り男は毒蛇からは逃げたのですが、犬と老夫婦に対する怒りが大きかったため、次の朝、犬をつないだ場所へととって返し、犬を殴り殺してしまいました。

CD 011

おじいさんとおばあさんは自分たちの犬の身に起きたことを聞いて愕然としました。恐怖心は悲しみに変わり、犬の死体を見つけるとすぐに家の近くに埋めてあげました。

それから毎日、老夫婦はお墓の前に座っては犬に祈りをささげました。あの欲張り男にむざむざ殺されるのを止めることができなかったことを許してほしいと祈りました。犬が死んだのは自分たちの責任だと思ったのです。

CD 012

数年がたち、お墓の近くに立派な松の木が育ったので、おじいさんはその木で新しい臼を作りました。出来上がるとすぐに2人はその臼を使ってなけなしの米をつき始めましたが、驚いたことに2人がそれを使うたびに金貨が数枚飛び出してきたのです。

「私たちの犬がしてくれているんですよ」。おばあさんは言いました。「あの子の魂が私たちを助けようとしているんですね」

2人は米をつき続け、金貨は床にこぼれ落ち続けました。その床は老夫婦が親切でやさしかった犬を思い出して流した涙で濡れていました。

CD 013

一方、欲張り男はそのころまでに盗んだ金貨をすべて使い果たしていました。賭け事ですって、もうすっからかんになっていました。男はまた貧乏になり、老夫婦の家の近くに舞い戻ってきていました。新しい臼から金貨が飛び出しているのを目にすると、男はすぐさま老夫婦の家に飛び込んでいき、その臼と金貨を持って行ってしまいました。2人はどうすることもできずに見ているばかりでした。

CD 014

男は家に帰ると、妻を呼びました。妻も男に負けず劣らず欲張りで、夫がしてきたことを聞いてとても喜びました。2人はすぐに米をつき始めました。

「これで新しい馬を7頭買うんだ」と、欲張り男は考えていました。

「新しい着物を7着買うのが待ち遠しいわ」。欲張りな妻はそう思っていました。

しかし、臼の中を見た2人は大声を上げました。

「いったいどうなってるのよ！」。欲張り女は金切り声を上げます。「私の金貨はどこなの？」

CD 015

金貨の代わりに、臼の中は大きな、鼻を突く臭い糞でいっぱいでした。欲張り夫婦は怒りのあまり、臼を叩き壊してしまいました。そしてその残骸を老夫婦の家の前に置きました。

「懲りない人もいる」。おじいさんは悲しそうに言いました。

老夫婦は臼の残骸を拾って、燃やしました。2人はその火の前で犬のために祈りました。

CD 016

おじいさんは灰を鉢に入れて野原へと行きました。そこで灰を撒こうとしたそのとき、突然強い風が鉢の中の灰を捲き上げ、木々の間に吹き飛ばしました。

秋も終わりのころで、木々にはまったく葉がなかったのですが、その灰が付くと、枝えだに白と桃色の花が咲き始めました。それは老夫婦がそれまで見た中でも一番きれいな花でした。

CD 017

まさにそのとき、殿様が家来を連れてあたりを通りかかりました。殿様は葉の落ちた森を進んできましたが、そこで突然甘い香りの花に取り囲まれました。その花があまりにもきれいだったので、殿様と家来たちは驚嘆の声を上げたほどでした。

殿様は木立の中を歩いている老夫婦を見つけ、声をかけました。「これ、そこのじいやとばあや、ここにある花はどこからやってきたのか存じておるか」

CD 018

おじいさんは灰が木に花を咲かせた様子を殿様に話しました。おじいさんの鉢にはまだ少し灰が残っていたので、そのことを証明しようと、少し手に取り、1本の木の枝に投げかけました。数秒後に、その枝は花でいっぱいになりました。

「これは何とも不思議だ。神様でもこんなことはできやしない」。殿様は笑顔でそう言いました。「おまえをこれから“はなさかじいさん”と呼ぶことにして、これから会う人みんなにこの話をしよう。このような美しさには褒美をつかわさなくてはならない。この金貨を受け取るがよい」

殿様は老夫婦に金貨のつまった大きな箱を2つ与えました。殿様と家来が馬に乗って立ち去るとき、老夫婦は感謝のお辞儀をしました。

CD 019

例の欲張り夫婦が近くの木の陰に隠れていて、殿様が言ったことすべてを聞いていました。「私たちはあの灰を手に入れなくては」。欲張り妻が言いました。「私たちも花を咲かせることができることを殿様に見せるのよ。そうすれば私たちも金貨をもらえるわ」

欲張り夫婦は老夫婦のところへ行きました。おじいさんとおばあさんを地面に押し倒すと、残った灰を奪い、殿様と家来のところまで追いついて行きました。

「あの木に登って、そこから灰を撒くのよ」。欲張り妻はそうささやきました。「そのほうが見栄えがするから」

欲張り男は木に登って、枝に乗りました。殿様と家来たちがその下を通ったとき、男は大声で言いました。「私をご覧ください。神々より力のある私を。この木々に花を咲かせることができるのです」

CD 020

殿様と家来たちは上を見上げました。欲張り男は灰を宙に撒きましたが、おかしなことに灰は花にはなりません。灰は灰のまま殿様と家来たちの上に落ちて、目をチクチクさせたり、息を詰まらせたりしました。

「これは襲撃だ」。家来の1人はそう叫ぶと弓矢を取り出し、欲張り男の心臓を射抜きました。それで男は息絶えました。欲張り女のほうはというと、恐怖で逃げ出し、残りの人生を孤独と貧乏と空腹のうちに過ごしました。それに対し、老夫婦はその後、幸せに暮らしましたとさ。